

## 小学校における教師の主体性の向上に着目した校内研修会の成果と課題

岸本 啓司

(向日市立第6向陽小学校 京都教育大学大学院教育学専攻科 修了)

Outcomes and Challenges of In-School Workshops for Teachers' Agency at Elementary schools

Keiji KISHIMOTO

2024年9月27日受理

抄録：筆者は、公立小学校で教務主任や管理職として人材育成に関わる中で、「校内研修会」をOJTの有効な機会として捉え、より効果的に活用できないかを研究してきた。本論文では、「教師の主体性の向上」に着目し、Project Based Learning の考え方を援用する校内研修会を実施することで、教師の主体性についてどのような変容があるのかを検証した。事後アンケートでは「自己省察」や「自己の態度」について肯定的な回答の割合が高く、得られた結果により、実践した研修方法は教師の主体性の向上について一定の効果があることが示唆された。また、この研修を進めるにあたり、リフレクションとフィードバックの機会を重視した。校内研修会を通して教師の主体性を高めることは、教師の「職能成長」につながるといえる。教師の主体性を尊重しながら人材を育成し、子ども一人一人の可能性を伸ばす教師を育てることは、子どもたちの成長に直結しているといえる。

キーワード：校内研修会 教師の主体性 教師の学び リフレクション Project Based Learning

### I. 問題と目的

#### 1. 教育現場における人材育成の課題

近年の教員の大量退職、大量採用等の影響により、教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始め、かつてのように先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることのできない状況があり、継続的な研修を充実させていくための環境整備を図るなど、早急な対策が必要である。

文部科学省が行う学校の教員構成並びに教員の個人属性、職務態様及び異動状況等を明らかにすることを目的とした「令和4年度学校教員統計調査（確定値）の公表について（令和6年3月27日）」によると、公立小学校教員の平均年齢は、前回調査（令和元年）と比較して0.5歳低下している。また、前回調査時より30歳未満の比率が増加し、50歳以上の比率が低下している。

こうした状況の中、令和2年に新しい学習指導要領が全面実施された。今回の改訂は「明治以来の大改革」とも言われる一連の教育の大改革であり、「社会に開かれた教育課程」や「カリキュラムマネジメント」「主体的・対話的で深い学び」といった理念が示された。これらの理念を実現するためには、中堅教員の活躍はもちろん、ベテラン教員の経験値をうまく活用しながら、若手教員の力を引き上げる取組が必要となる。このような状況の中で、求められる資質能力をどのように育むかが課題となる。

#### 2. 校内研修会の課題

教師は、学校教育の専門家であり、教師になってからもその専門性を高め、指導力を向上させることが求められる。教育基本法第9条には「法律の定める学校の教員は、自己の崇高な使命を深く自覚し、絶えず研究と修養に励み、その職責の遂行に努めなければならない」と明記されている。また、教育公務員特例法第21条にも「教育公務員は、その職務を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない」と定められている。そこで、国

や都道府県または市町村の教育委員会などの行政機関が率先しておこなう研修や大学が実施する校外研修だけでなく、学校現場で実践的な学びとなる校内研修は重要な営みとして位置づけられてきた。しかし、その一方で、校内研修の実態については、実質的な意味を失い、形骸化に陥りやすいこと、授業研究が忌避されること、教員の中に研究自体に対してネガティブなイメージが存在すること、専門家としての学び合いの場になっていないことなどの課題もある。

このような中、教師の学びについては、中央教育審議会答申（2022）『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～において、「新たな教師の学びの姿」として、変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという「主体的な姿勢」、求められる知識技能が変わっていくことを意識した「継続的な学び」、新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した「個別最適な学び」、他者との対話や振り返りの機会を確保した「協働的な学び」を示している。また、教師の学びの内容の多様性と、自らの日々の経験や他者から学ぶといった「現場の経験」も含む学びのスタイルの多様性を重視するということも重要である。この観点からも、教師の個別最適な学びの実現のみならず、協働的な学びを実現していくことが必要であると示しており、時代に合わせた「研修観の転換」が求められている。

### 3. 本研究の目的

筆者は、2022 年度修士論文『小学校における「Project Based Learning」の手法を取り入れた校内研修会の成果と課題』において、Project Based Learning（以下 PBL）型研修の成果と課題について言及した。その中で、「主体性」「自己効力感」「同僚性」について事前・事後アンケートやインタビュー調査を通してその効果や課題について検証した。その結果、これからの教師にとって必要とされる資質能力の 1 つである「主体性」について一定の効果が認められた。そこで、今回は、前回の研究を土台として、教師の「主体性」の向上についてより詳細に検証する。主体性を育成するには、受け身の講義的研修ではなく、主体性が保証された研修で有効であることや、そうした研修の実践例は少ないので、研修プログラムを開発し、その有効性を検証することとする。

また、今回は、前回の実践において課題となった点を改善して PBL 型研修を実施することとした。主な改善点は、以下の通りである。

- ・年間を通して PBL 型研修を進める。
- ・授業を受け持つ教員は、参観者のある研究授業を必ず実施する。
- ・研修を進めるにあたり、リフレクションとフィードバックの機会を重視する。
- ・「主体性」に着目して成果と課題を検証する。

### 4. 主体性について

教師は、そもそも教育の専門家であり、それぞれの教室で、自律的に授業など教育活動を行っているのも、主体的であるといえる。しかしながら、敢えて注目されている理由として、秋田（2021）は、「2017 年から 2019 年までは新たな学びの枠組み、学びの方向性を示す羅針盤という意味で Learning Compass が議論されました。そして、新たな学びのあり方を実際に実践する教師のあり方について、2020 年からの 3 年間では、教師の専門性をターゲットにした専門家グループができ、これからの教師・教職について議論が進められています。そこでは、「教師の資質能力（competency）」「教師の主体性（agency）」「教師のウェルビーイング（wellbeing）」の 3 概念がセットになって議論されています。」「教師の主体性が今問われているのは、教師が本当に自律的に子どもたちに応じる責任を持つ行動が自由に判断できる状況にあるのか、その難しさが問われているからです。」と述べている。

また、ここでいう主体性（agency）について、バンデューラは、社会的状況に対する行為主体の社会認知的な力を「エージェンシー」と概念化している。そして、人は、伝統的な学習理論が提示してきたような環境に対して受け身の存在ではなく、環境に積極的に関わり相互作用をし、良くも悪くも自己に関連付けた思考を作り上げ、行為につなげていく主体的な存在であると説いている。教師にとってこのような主体性を涵養することは、「探究心を持ちつつ自律的に学ぶ」ことにつながり、教職員の力量形成がより深く、豊かになると考えられる。そして、溝上（2020）は、バンデューラの説くエージェンシーの 4 つの特徴が OECD の学習者エージェンシーの特徴をうまく

説明していると述べている。ここでいう4つの特徴とは、①意図性（行為を計画すること）、②将来の見通し（目標をもち将来展望を伴うこと）、③自己の態度（実現にむけて一連の適切な行為を具体化し、自身を動機づけ自己調整すること）、④自己省察（行為に付随する考え方や適切さを省察するメタ認知的な検討）の4つである。これら4つの特徴が相絡まって機能し、エージェンシーは行為を主体的なものにしていくと考えられている。そこで、本研究では、主体性についてバンデューラの説くエージェンシー4つの特徴をもとに捉えることにした。

## Ⅱ．研究の方法

### 1．PBL 型研修の概観

PBL は、アクティブラーニングへのアプローチの方法として近年注目されている。PBL については、Problem Based Learning と Project Based Learning の2つがある。Problem Based Learning は、「問題解決学習」「問題解決型学習」「問題基盤学習」などと呼ばれ、医療系の教育機関で開発され発展してきた。長い歴史があり、その戦略も多様になっているが共通していることは、問題（Problem）の解決を通して学習をすすめることである。また、Project Based Learning は、キルパトリックのプロジェクトメソッドを基にして発展してきたと言われている。ちなみに、プロジェクトメソッドとは、デューイの流れをくむキルパトリックが20世紀初めにアメリカで開発した経験学習の方法原理である。

本研究では、教師が、重点研究として目指す子ども像育成への Project を企画して実行し、その効果を検証するので、Project Based Learning として捉えておきたい。

そして、Project Based Learning は、現在 多くの小中学校における学習方略の一つとなっている。典型的な流れは、「テーマを設定する」「問題や仮説をたてる」「先行研究をレビューする」「問題解決に必要な知識や情報を調べる」「結果を踏まえて考察を行う」「発表を行ったりレポートを書いたりする」である。この流れは、研究者が行う研究活動の進め方を取り入れている。このような学習者主体で実践的な学習方法である Project Based Learning を、教職員の学びの場である校内研修に援用することで、教師の主体性が発揮されるのではないかと考えている。

### 2．PBL 型研修の内容

#### (1) PBL 型研修の目的

従来型の校内研修（一部の役割の者が研究主題を立て進めていく形、昨年度までの研究方法）ではない「Project Based Learning の手法を取り入れた校内研修」を実施することで、教師の学びの多様性について対応するとともに、この研修を通して、教師の個別最適な学びだけでなく、協働的な学びを実現する。そして、PBL のもつ特徴である学習者が自ら、学習の目標を立て、学習遂行のための具体的な計画を立て、実際に遂行し、結果を反省的に考察するというプロセスで展開することで、教師が主体的な学習経験をし、教師に必要とされる「主体性」を高める。

#### (2) 内容

学校の重点研究のテーマである「人とのつながりを通して主体的に学ぼうとする児童の育成」のために、教師は「現在の状態」と「望ましい状態」の隔たりから問題を把握して、自らが研究したいことから課題を設定し、似通った課題の教師が集まり、プロジェクトチームを構成して Project Based Learning の流れに沿って研究を進める。

#### (3) Project Based Learning の手法を取り入れた研修の流れ

先行研究を踏まえて構想した Project Based Learning の手法を取り入れた研修の流れは、「1 課題に出会う」「2 課題解決方法について考える／問題解決に必要な知識や情報を調べる」「3 課題解決にむけた活動を行う」「4 結果を踏まえて考察を行う」「5 成果発表のあとフィードバックを行う」である。一般的な Project Based Learning の流れと比較して表に示すと以下の通りとなる。（表1）。

表1 Project Based Learning の手法を取り入れた研修の流れ

| 一般的な Project Based Learning の流れ | Project Based Learning の手法を取り入れた校内研修の流れ                                                                                                         |
|---------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 課題に出会う                        | <u>1 課題に出会う</u> 本校の重点研究テーマである「人とのつながりを通して主体的に学ぼうとする児童の育成」のために、教師は「現在の状態」と「望ましい状態」の隔たりから問題を把握して、自らが研究したいことから課題を設定し、似通った課題の教師が集まり、プロジェクトチームを構成する。 |
| 2 どうしたら解決できるかを実践的論理的手法で考える。     | <u>2 課題解決方法について考える／問題解決に必要な知識や情報を調べる</u><br>課題解決のために先行実践や資料をもとにして必要な知識や情報を収集し、課題解決の方法について考える。                                                   |
| 3 相互に話し合い、何を調べるのかを明確にする。        |                                                                                                                                                 |
| 4 自主的に学習する。                     | <u>3 課題解決にむけた活動を行う</u><br>各プロジェクトチームが立てた計画をもとに授業実践等を行う。研究計画に沿って随時研究授業を行う。<br>※管理職や指導主事は、メンター的な役割で参加する。                                          |
| 5 新たに獲得した知識を問題に適用する。            | <u>4 結果を踏まえて考察を行う</u><br><u>5 成果発表のあとフィードバックを行う</u><br>結果を踏まえて考察を行う。<br>成果発表会で研究成果を報告するとともに、各グループから改善点や評価を伝える。<br>実践を振り返り省察する。                  |
| 6 学習したことを要約し発表交流する。             |                                                                                                                                                 |

注) 表中の一般的なProject Based Learningの流れは、「総合的な教師力向上のための調査研究事業報告書 今日的な教育課題を解決するためのPBL型授業の構築」上越教育大学(2019)より

(4) 研究協力者

研究協力者の学校種は、公立小学校、人数は18名(中間アンケートと事後アンケートの両方回答した者)である。経験年数は、以下の通りである。5年末満の者3名、5～10年の者1名、11～15年の者7名、16～20年の者2名、21年～25年の者2名、25年以上の者3名

(5) 筆者の役割

筆者は、研修全体をファシリテートするファシリテーターとしてこの校内研修会に携わった。ファシリテーターとして関わった主な内容は、下記の通りである。

ア 校内研修会の企画・立案及び教師への提案

イ テーマ設定及びプロジェクトチームづくりの支援

ウ 中間発表会及び成果交流会の企画・運営

エ 各グループの活動状況の把握及び情報発信による成果共有(研究通信の発行)

### 3. PBL型研修の実際

(1) 課題に出会う

4月当初に教職員全員でワークショップを行い、学校教育目標を念頭に置いて、教職員が思い描く「理想の子ども像(ゴールイメージ)」を出し合った。そして、共通する言葉を抜き出し、整理することにより、研究推進部が、研究主題を作成した。作成した研究主題は「人とのつながりを通して主体的に学ぼうとする児童の育成」である。

5月～7月の校内研究会では、個人の課題設定とプロジェクトチームづくりを行った。教職員全員で作成した研究主題「人とのつながりを通して主体的に学ぼうとする児童の育成」のために、教師は「現在の状態」と「望



ましい状態」の隔たりから問題を把握して、自らが研究したいことから課題を設定した。それを元にして、研究推進部は7つのプロジェクトに整理した。研修の参加者は、7つのプロジェクトから、自分の課題に近いプロジェクトを選択し、プロジェクトチーム作りを行った。決定したプロジェクトは表2の通りである。

表2 プロジェクトの概要 等

|   | プロジェクトの概要               | 期待する変容                                                         | メンバー                                                 |
|---|-------------------------|----------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------|
| A | 伝え合い、認め合う場面を大切に授業作りを行う。 | 伝え合う場面を大切にしたら、新たな気づきが生まれ、主体的な学びにつながるのではないかな。                   | T3 (1), T17 (6)<br>T18 (6)                           |
| B | UD の視点を取り入れた全員参加の授業作り   | 子どもたちは、意欲的に考え、積極的に交流し、考えを深め、主体的に学ぶのではないかな。(道徳の授業、異学年で同じ資料を使う。) | T6 (3), T10 (3),<br>T13 (4), T15 (5)                 |
| C | 異学年交流を通じた授業作り           | 異学年で交流する場面を設定することで、子どもたちは、積極的に学習課題に向かい、主体的に学ぶのではないかな。          | T2 (1), T5 (3),<br>T7 (3) T12 (3),<br>T14 (4)        |
| D | ICT を効果的に活用した授業作り       | ICT を効果的に使い、授業で有効活用することで、児童の主体的な学びにつながるのではないかな。                | T1 (1), T4 (2),<br>T8 (3) T9 (3),<br>T5 (3), T16 (5) |

メンバーにつけている(数字)は、教職経験年数5年未満(1)、5年～10年(2)、11年～15年(3)、16年～20年(4)、21年～25年(5)、26年以上(6)とした。

T11について…事後アンケート回答時休養中のため事後のアンケートには回答をしていない。

T15について…通級担当のために研究授業は行っていない。

T19について…管理職のためプロジェクトチームには属していない。

## (2) 課題解決の方法について考える／問題解決に必要な知識や情報を集める

夏季休業中(7月後半～8月)の校内研修会では、個人で課題解決に向けての計画を立てた。参加者は、自らの課題に合わせて、探究する教科や単元を決定した。そして、課題解決にむけて、先行研究等を参考にして必要な情報を収集し、研究授業の準備などを行った。その後、各プロジェクトで個人の計画を交流し、プロジェクトチームの計画を立てた。9月13日の校内研修会では、プロジェクトチームの計画を模造紙にまとめ、それを発表する「プロジェクトの計画交流会」を行った。発表を聞く側は、感想や意見を付箋に書き、フィードバックを返すことで、それぞれのプロジェクトの研究と自分の日々の実践とのつながりを探るようにした。

## (3) 課題解決にむけた活動を行う

参加者は、授業研究を通して、課題解決を行うこととした。研究授業を行うにあたって、各自が、「授業作りシート」を作成し、それを元にして各プロジェクトチームで事前の授業検討会を行った。授業研究会については、研究推進部が発行する「研究通信」を通して、校内全員に周知するとともに、同じプロジェクトのメンバーは、基本的に授業を参観することとした。授業の参観者は、授業後にFormsを活用して授業についての感想等フィードバックを行った。そして、研究授業後は、研究推進部で授業の成果や課題についてまとめた「研究通信」を発行し、教職員全員に授業の成果や課題を周知し、情報共有できるようにした。また、各プロジェクトで1つの授業は、「中心授業」に設定し、教職員全員が参観するとともに、事後研究会にも全員が参加して、授業の成果や課題について交流することとした。但し、2月8日については、市の指定授業のため、職員は2つの授業について半分に分かれて参観をした。また、この日の授業については他校からの参観もあった。

研究授業の記録については、以下の通りである。(左より 日時／指導者／プロジェクト名／学級／教科・領域／単元名／参観者数／授業改善の視点／主なフィードバック)

【研究授業1】9月19日1校時／T1／ICT活用プロジェクト／2年2組／国語科／ニャーゴ／8名／ICTを活用することで児童の意見を発信する機会を増やす／子ども達は「うちの読んで」「おれの読んで」と言っていたので自分の思いを表現したいという意欲を感じることができた。そこに上手くICTを活用していくことは有

効な手立てだと思った。

【研究授業2】10月24日1校時/T14/異学年交流プロジェクト/特別支援学級2組/自立活動/支援学校の友達と遊ぼう/10名/自分たち中心ではなく、相手（交流する特別支援学校の児童）中心で、交流遊びを考える。/今までの経験を振り返る活動や、遊びの案を出す活動で、教師の意見を先に出さず、できるだけ、子ども達から今までの経験や思いを引き出すように丁寧に進めておられたのが素敵でした。クラス全体に、先生や友だちの声を聞こうとする雰囲気がありました。

【研究授業3】10月27日4校時/T8/ICT活用プロジェクト/4年2組/国語科/山場のある物語を書こう/12名/ICTを活用して視覚支援を行えば、児童は主体的に学ぼうとするのではないか/どの児童もタブレット思考ツールを使いこなしていました。先生と児童それぞれの会話から、この授業の初めから児童が考え積み上げてきた物語をよく理解しておられるなあと感じました。

【研究授業4】11月1日3校時/T9/ICT活用プロジェクト/6年2組/体育科/マット運動/22名※中心授業/体育の授業でICTによる静止画や動画を活用し、自分の試技を確認することで、新たな気づきが生まれ技能を高められるのではないか/ICTを活用することで児童の意識（活動のポイント）は間違いなく高まっていた。結果、15分の短時間で開脚の膝が伸びるようになった児童が増えた。

【研究授業5】11月8日5校時/T6/UD（全員参加）プロジェクト/特別支援学級1組/特別の教科道徳/にじいろのさかな/22名※中心授業/視覚化や動作化を取り入れることで子どもたちは意欲的に考えるのではないか/動作化があることで授業参加の元となる集中の継続や気分転換の刺激となつてよかったと思う。全員参加の基礎として、日常の人間関係も大きく影響しているように思えた。4年生以下の子どもたちは日常からよく遊び、活動を共にしていることでお互いを知り、遠慮なく意見を言い合える関係である。そのことが、誰もが発言できる環境を生み出していると感じた。

【研究授業6】11月9日4校時/T18/伝え合いプロジェクト/2年1組/生活科/うごくうごくわたしのおもちゃ/10名/おもちゃをつくりたいという思いだけでなく、友達のアドバイスを受け入れてよりよく動かすための工夫に気づく/試行錯誤をしながら気づいたことを伝えたり、困っていることを一緒に考えたりどの子も主体的に学習に参加しており、参観している者も楽しくなる中身でした。「パッチンガエル」がより高く跳ぶ工夫や遊び方など子ども達から多様な考えが出され、交流出来ていたことは「対話的で深い学び」になるものだと感じました。

【研究授業7】12月7日3校時/T5/異学年交流プロジェクト/1年1組/生活科/たのしい あき いっぱい/8名/異学年に伝えるという目的があれば、児童は相手意識をもって行動できるのではないか/1年生にとって、入学して以来「してもらう」ことが多い学校生活で、自分たちが「してあげる」という立場に立っての活動は大変意味があると感じた。2学期末の忙しい時期ではあったが、時期的にも「もうすぐ2年生」という、「してあげる」意識を育むのにぴったりだったと思う。また、本校の特色でもある、きょうだい学年の取組の成果が大いに発揮されたとも感じた。

【研究授業8】12月12日4校時/T3/伝え合いプロジェクト/5年1組/算数科/割合/7名/考えを伝え合う場面を有効に設定したら、児童の理解が深まるのではないか/授業の中で自分の思考を元に話し合うタイミングが良かったです。話し合ったことをホワイトボードにまとめていた時、「図と式」にきちんと分けてどのグループもパターン化されていたので、比較検討しやすかったと思います。比較検討がしっかりできたからこそ、まとめを導き出しやすかったと感じました。

【研究授業9】2月8日5校時/T17/伝え合いプロジェクト/6年2組/特別活動/いろいろな性ってなんだろう/18名※中心授業/児童の意見や考えを丁寧に捉え、認めることでいろいろな性について正しく理解し、考えを深める。/どの子も真剣に考えていて、この時期の子どもたちにこの教材を学ばせることの大切さを感じました。最後の振り返りでそれぞれの違いを認めていくことの大切さについて気づき、学び取っている児童がおり、これまでの学習の流れや内容が深まっていることがわかりました。

【研究授業10】2月8日5校時/T2/異学年交流プロジェクト/4年1組/体育科/跳び箱運動/17名※中心授業/（異学年交流で）「跳び箱の楽しさ」を伝えることを目的に学習をしたら、児童はより主体的に学ぶのではないか/目的があるため、全員が前向きに授業に参加できていたようである。体育の授業では、「でき

た」「できなかった」で単元が完結しがちであるが、出来た児童も再度ポイントを意識した時間を設けることで、さらに技能を高める時間となったように感じられる。

【研究授業 11】2月20日4校時/T13/UD（全員参加）プロジェクト/6年1組/特別の教科道徳/にじいろのさかな/7名/道徳の授業にUDを取り入れることで、意欲的に考え、積極的に交流し、考えをふかめるのではないかと。/児童の発表にネームカードを使うことで、意見が言いにくい児童も自分の意見を伝えられるので、全員参加の授業としてとても良かったです。

【研究授業 12】3月7日4校時/T10/UD（全員参加）プロジェクト/3年2組/特別の教科道徳/にじいろのさかな/7名/道徳の授業にUDを取り入れることで、意欲的に考え、積極的に交流し、考えをふかめるのではないかと。/Which型発問の授業展開の良さを感じた授業でした。なかなか発言しにくい雰囲気の中でも、どの子も自分の考えを持ちやすかったのはWhich型であったからだと思いました。教師がゆさぶり発問の際に「物さえあげればなれる？」とさらに突っ込んだ質問をしたところは核心をついていて良いと思いました。

【研究授業 13】3月11日4校時/T12, T7/異学年交流プロジェクト/5年2組/総合的な学習の時間/Let's interview welcome to Japan/7名/異学年交流（6年生）を設定すれば、児童はより主体的に活動できるのではないかと。/相手意識と意欲の向上が目に見えてわかる授業内容でした。基本的に学年全体として、活動への意欲の高さは感じられていたが、今回の総合的な学習の時間では、「意欲」プラス「質」の向上につながる内容だったと思う。「質」の向上と言うのが、「深い学び」なのではないかと個人的には感じた。

【研究授業 14】3月12日2校時/T4/ICT活用プロジェクト/1年2組/生活科/きれいにさいてね/7名/ICTを活用して視覚支援を充実したら、児童は主体的に学習を進めるのではないかと。/ヒヤシンスの生長の比較がICTを活用することで分かりやすくなり、子どもたちは、その変化をよく観察していました。

【研究授業 15】3月15日5校時/T11, T16/ICT活用プロジェクト/3年1組/国語科/くわしく表す言葉/5名/プログラミングアニメーションを活用することで、児童は意欲的に学習し、言葉の理解についてもより深まるのではないかと。/アニメーションを見て文章に表現するという発想が斬新で面白かったし、子ども達も楽しんで学習していました。授業のはじめの頃にはあまり手を挙げる子が少なかったのが、後半の文章からアニメーションを作り発表する場面では結構手があがっていました。子ども達の意欲が増したことがよく分かりました。

#### (4) 結果を踏まえて考察を行う

個人では、研究授業のあと、プロジェクトチームを中心に行う「事後研究会」研究推進部が集約した授業後の「フィードバック」、研究推進部が発行する「研究通信」等を活用して、実践を振り返り、「省察」する機会を設定した。また、プロジェクトチームでは、プロジェクトのまとめの時間を設定し、1年間の活動を振りかえるようにした。

#### (5) 成果発表のあとフィードバックを行う

年度末の校内研修会で「成果発表会」を設定した。各プロジェクトは、1年間の活動の成果について発表を行った。また、参加者は、付箋を通して「成果」や「改善点」をフィードバックした。

各プロジェクトの「成果交流会」のフィードバックでは、他のプロジェクトの活動について肯定的な評価が多くあった。例えば、ICTプロジェクトの成果発表のフィードバックでは、「（このプロジェクトの活動が）ICT活用のきっかけになった。」とか「参観したタブレット活動の事例を自分の学級で取り入れてみて、効果的だった」などの評価があった。

### Ⅲ. 結果分析及び考察

#### 1. アンケートについて

中間アンケート（10月）と事後アンケート（3月）の2回実施した。質問項目は、「教師の主体性」に関わる10項目とした。従来の校内研究の方法（昨年度までの研究方法）と比較する形で「そう思う」「ややそう思う」「変わらない」「あまり思わない」「全く思わない」の5件法で回答を求めた。アンケート項目は表3の通りである。

表3 質問項目

| 質問項目                             | バンデューラのエージェンシー論4つの特徴との関連 |
|----------------------------------|--------------------------|
| ※従来の方法と比較して今回の方法は、どうか。           |                          |
| 1 自分の得意分野を生かすことができている            | 3 自己の態度                  |
| 2 自分で計画をたて計画的に活動できている            | 1 意図性                    |
| 3 自分で選択して決めることが保障されている。          | 3 自己の態度                  |
| 4 研究主題（目的）を意識して活動できている           | 2 将来の見通し                 |
| 5 自ら意欲的に教材研究を行うことができている          | 3 自己の態度                  |
| 6 自分の実践を発信できている。                 | 3 自己の態度                  |
| 7 リフレクション（省察・ふりかえり）する機会が保障されている。 | 4 自己省察                   |
| 8 自分のやりたいことができている。               | 3 自己の態度                  |
| 9 日々の授業や自分の実践に繋がっていると思う          | 3 自己の態度                  |
| 10 他者からのフィードバックが保障されている          | 4 自己省察                   |

## 2. アンケートの結果とその分析

アンケートの結果は下記の通りである。

| 中間アンケート(10月) |        |      |     |      |      |      |      |         |        |       |         |     |     |
|--------------|--------|------|-----|------|------|------|------|---------|--------|-------|---------|-----|-----|
| 参加者          | プロジェクト | 得意分野 | 計画性 | 自己選択 | 目的意識 | 教材研究 | 情報発信 | リフレクション | やりたいこと | 日々の実践 | フィードバック | 合計点 | 平均点 |
| T1           | D      | 3    | 4   | 5    | 4    | 4    | 3    | 4       | 4      | 3     | 3       | 37  | 3.7 |
| T2           | C      | 5    | 5   | 5    | 5    | 5    | 5    | 5       | 5      | 5     | 5       | 50  | 5.0 |
| T3           | A      | 2    | 2   | 4    | 3    | 4    | 2    | 4       | 3      | 3     | 4       | 31  | 3.1 |
| T4           | D      | 4    | 4   | 5    | 4    | 4    | 4    | 3       | 5      | 5     | 3       | 41  | 4.1 |
| T5           | C      | 4    | 4   | 5    | 5    | 4    | 4    | 5       | 4      | 5     | 5       | 45  | 4.5 |
| T6           | B      | 4    | 4   | 5    | 4    | 5    | 5    | 4       | 4      | 5     | 4       | 44  | 4.4 |
| T7           | C      | 2    | 2   | 4    | 3    | 3    | 4    | 2       | 4      | 4     | 4       | 32  | 3.2 |
| T8           | D      | 4    | 4   | 4    | 4    | 3    | 4    | 4       | 4      | 4     | 3       | 38  | 3.8 |
| T9           | D      | 4    | 4   | 4    | 4    | 4    | 4    | 4       | 4      | 4     | 4       | 40  | 4.0 |
| T10          | B      | 5    | 5   | 5    | 4    | 4    | 5    | 5       | 5      | 5     | 5       | 48  | 4.8 |
| T12          | C      | 3    | 3   | 3    | 3    | 2    | 1    | 2       | 4      | 2     | 2       | 25  | 2.5 |
| T13          | B      | 4    | 2   | 4    | 3    | 3    | 4    | 3       | 4      | 3     | 3       | 33  | 3.3 |
| T14          | C      | 4    | 4   | 5    | 5    | 4    | 4    | 3       | 4      | 5     | 3       | 41  | 4.1 |
| T15          | B      | 2    | 2   | 3    | 3    | 3    | 3    | 3       | 3      | 3     | 3       | 28  | 2.8 |
| T16          | D      | 3    | 4   | 5    | 4    | 5    | 5    | 5       | 4      | 5     | 4       | 44  | 4.4 |
| T17          | A      | 2    | 2   | 3    | 2    | 2    | 4    | 3       | 3      | 3     | 3       | 27  | 2.7 |
| T18          | A      | 3    | 4   | 5    | 5    | 3    | 3    | 5       | 3      | 3     | 4       | 38  | 3.8 |
| T19          |        | 5    | 4   | 5    | 4    | 4    | 5    | 3       | 5      | 4     | 3       | 42  | 4.2 |
| 合計点          |        | 63   | 63  | 79   | 68   | 67   | 69   | 67      | 72     | 71    | 65      | 684 |     |
| 平均           |        | 3.5  | 3.5 | 4.4  | 3.8  | 3.7  | 3.8  | 3.7     | 4.0    | 3.9   | 3.6     |     | 3.8 |

| 事後アンケート(3月) |        |      |     |      |      |      |      |         |        |       |         |     |     |
|-------------|--------|------|-----|------|------|------|------|---------|--------|-------|---------|-----|-----|
| 参加者         | プロジェクト | 得意分野 | 計画性 | 自己選択 | 目的意識 | 教材研究 | 情報発信 | リフレクション | やりたいこと | 日々の実践 | フィードバック | 合計点 | 平均点 |
| T1          | D      | 3    | 4   | 5    | 4    | 4    | 3    | 5       | 4      | 4     | 5       | 41  | 4.1 |
| T2          | C      | 5    | 5   | 5    | 5    | 5    | 5    | 5       | 5      | 5     | 5       | 50  | 5.0 |
| T3          | A      | 3    | 2   | 4    | 3    | 3    | 3    | 4       | 4      | 3     | 4       | 33  | 3.3 |
| T4          | D      | 4    | 4   | 5    | 4    | 4    | 4    | 5       | 4      | 4     | 4       | 42  | 4.2 |
| T5          | C      | 5    | 4   | 5    | 5    | 5    | 5    | 5       | 5      | 5     | 5       | 49  | 4.9 |
| T6          | B      | 4    | 4   | 5    | 5    | 5    | 4    | 4       | 5      | 5     | 4       | 45  | 4.5 |
| T7          | C      | 3    | 3   | 4    | 4    | 4    | 4    | 4       | 4      | 4     | 4       | 38  | 3.8 |
| T8          | D      | 4    | 4   | 4    | 4    | 3    | 4    | 3       | 4      | 4     | 4       | 38  | 3.8 |
| T9          | D      | 4    | 4   | 4    | 4    | 4    | 4    | 4       | 4      | 4     | 4       | 40  | 4.0 |
| T10         | B      | 5    | 4   | 5    | 5    | 4    | 4    | 5       | 5      | 5     | 5       | 47  | 4.7 |
| T12         | C      | 3    | 4   | 4    | 4    | 2    | 3    | 4       | 3      | 3     | 4       | 34  | 3.4 |
| T13         | B      | 4    | 3   | 4    | 4    | 3    | 4    | 5       | 4      | 4     | 5       | 40  | 4.0 |
| T14         | C      | 5    | 5   | 5    | 5    | 5    | 4    | 5       | 5      | 5     | 5       | 49  | 4.9 |
| T15         | B      | 4    | 2   | 4    | 3    | 3    | 3    | 2       | 4      | 4     | 2       | 31  | 3.1 |
| T16         | D      | 4    | 4   | 4    | 4    | 4    | 4    | 5       | 4      | 4     | 5       | 42  | 4.2 |
| T17         | A      | 4    | 2   | 4    | 2    | 3    | 3    | 3       | 4      | 2     | 3       | 30  | 3.0 |
| T18         | A      | 5    | 5   | 5    | 5    | 5    | 5    | 5       | 5      | 5     | 5       | 50  | 5.0 |
| T19         |        | 5    | 4   | 5    | 3    | 5    | 4    | 3       | 5      | 5     | 3       | 42  | 4.2 |
| 合計点         |        | 74   | 67  | 81   | 72   | 72   | 69   | 77      | 78     | 75    | 76      | 741 |     |
| 平均          |        | 4.1  | 3.7 | 4.5  | 4.0  | 4.0  | 3.8  | 4.3     | 4.3    | 4.2   | 4.2     |     | 4.1 |



- ・中間アンケート、事後アンケートの全ての質問項目において平均値で比較すると「3 従来の研修と変わらない」を上回っていた。(3.5~4.5)
- ・事後アンケートでは、「1 自分の得意分野を生かすことができている」「3 自分で選択して決めることが保障されている。」「6 自分の実践を発信できている。」「8 自分のやりたいことができている。」の4項目において、全ての参加者が3以上と回答していた。
- ・事後アンケートにおける5または4を回答した割合は、「3 自分で選択して決めることが保障されている。」(100%)「8 自分のやりたいことができている。」(94%)「7 リフレクション(省察・ふりかえり)する機会が保障されている。」(83%)「9 日々の授業や自分の実践に繋がっていると思う」(83%)「10 他者からのフィードバックが保障されている」(83%)が他の質問項目と比較して高かった。

以上のことから、本研修会の進め方は、従来の研究の進め方と比較して「主体性の向上」について一定の成果があると考えられる。

- ・中間アンケートと事後アンケートで比較すると、9つの質問項目において平均値で伸びがみられた。
- ・中間アンケート(684点)と事後アンケートの合計点(741点)で比較すると57点の伸びがみられた。
- ・中間アンケートと事後アンケートで比較すると、18名中11名の参加者の平均点に伸びがみられた。

以上のことから、この研究方法に慣れ、研究を進めるにつれて、点数が伸びる傾向のあることがわかった。また、中間アンケート実施時点では、18名中5名の参加者が、研究授業を実施または研究授業の準備を進めていた。その時点の5名の平均点は4.0だった。研究授業の実施または研究授業の準備を進めている参加者は、他の参加者よりも平均点が高いことがわかった。

- ・事後アンケートについて、「バンデューラのエージェンシー論4つの特徴との関連」に着目して、それぞれの平均点を比較すると、①意図性(行為を計画すること)3.7点、②将来の見通し(目標をもち将来展望を伴うこと)4.0点、③自己の態度(実現にむけて一連の適切な行為を具体化し、自身を動機づけ自己調整すること)4.2点、④自己省察(行為に付随する考え方や適切さを省察するメタ認知的な検討)4.3点だった。

以上のことから、④自己省察(行為に付随する考え方や適切さを省察するメタ認知的な検討)及び、③自己の態度(実現にむけて一連の適切な行為を具体化し、自身を動機づけ自己調整すること)について、他より平均点が高いことが分かった。④自己省察の向上については、参加者全員に「研究ノート」を配布してスタディログを残すように促したことや、全ての研究授業において授業の記録や参観者からのフィードバックを掲載した「研究通信」を発行し、それをリフレクションの材料として活用したことが成果として表れているのではないかと考えられる。また、③自己の態度については、年間を通して、筆者や研究推進部は、ファシリテーター役やコーディネーター役に徹し、参加者自身が自己の態度を決定できるように研究を推進した成果だと考えられる。

## IV. 研究のまとめと今後の課題

### 1. 研究のまとめ

本研究は、筆者の、2022年度修士論文『小学校における「Project Based Learning」の手法を取り入れた校内研修会の成果と課題』を受けて、明らかになった課題を修正し、より多くの学校現場で実際に使える研修モデルを考案し、勤務校で実践したものである。教師の主体性に着目して中間、事後アンケートを実施し、その結果を分析することで、教師の主体性の向上に一定の効果が認められた。この研修の進め方について校長は、「教師個人の取り組みたいことを尊重することは、学びの多様性に対応しているといえる。それは、個別最適な学びとなっているので、意欲の向上につながっていると感じた。また、各プロジェクトで進捗状況を確認するプロジェクト交流会が設定されていたので、お互いが刺激し、切磋琢磨する良い機会になっていた。」と感想を述べていた。また、筆者とともに研究の中心となった教務主任は「自分の所属するプロジェクトでは、研究を進めるにつれて、(研究授業でもないのに)授業を見に来てほしいという教師が複数現れ、よい刺激になった。研修についてポジティブなイメージを持ち、日常的な学びにつながっていると感じた。」と感想を述べている。

最後に、この研修会を通して大切してきた概念である教師の主体性について、千々布(2021)は、これからの

教師に求められる資質について OECD ラーニングコンパスと学習者エージェンシーと関連して教師エージェンシーについて次のように言及している。「学習者エージェンシーをはぐくむために「教師エージェンシー」が求められるのは当然だろう。だが, Education2030 では教師エージェンシーまでは言及していない。小柳(2019)は, カルバート(2016), ビースタラ(2015)を引用しながら「教員が自分の教育活動と学校の取組を向上させるために, 同僚と互いに関わり学びあうことを通じて, 子供のため, 自分のため, そして同僚のために何か貢献しているという, この違いを生み出すという感覚と, 違いを生み出すことに向けた動機, 主体的な態度」を教師エージェンシーと定義している。そして, 教師エージェンシーは権利ではなく, 教師に求められる新しい資質なのである。」と述べている。

この教師エージェンシーという概念は, 本研究で行った PBL 型研修のねらいとも通ずるところがある。教師エージェンシーの高い教師は, 学校を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め, 教職生涯を通して探究心を持ちつつ, 自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続けると考えられる。よって, 教師エージェンシーを高めることは, 教師の「職能成長」につながっていると考えられる。また, 学校で最も身近な存在といえる教師の学びの姿は, 子どもたちにとって重要なロールモデルになり, 子どもたちの学びと成長に良い影響を与えるといえよう。学校教育の成否は, 教師の力に大きく依存していることはいままでもない。

今後は, 学校という教育現場で, 今回, 提案した PBL 型研修のような研修プログラムを通して, 教師の主体性を尊重しながら, 人材を育成し, 子ども一人一人の可能性を最大限に引き出す教師を育てていくことが重要であるといえる。

## 引用・参考文献

- 秋田喜代美(2021)『これからの教師研究 20 の事例にみる教師研究方法』 東京図書 2-5
- 石野正彦(2019)「総合的な教師力向上のための調査研究事業報告書 今日的な教育課題を解決するための PBL 型授業の構築」上越教育大学 7-11
- 岸本啓司(2022)「小学校における Project Based Learning の手法を取り入れた校内研修会の成果と課題」  
京都教育大学大学院教育学研究科修士論文
- 小柳和喜雄(2019)「専門的な学習ネットワークが授業改善に向けた教員の指導性と主体性の構築に及ぼす影響に関する基礎研究奈良教育大学教職大学院研究紀要『学校教育実践研究』11 巻」, 1-10
- 溝上慎一(2020)『学びと成長の講話シリーズ3 社会に生きる個性—自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー—』東信堂 92-105
- 文部科学省 「令和4年度学校教員統計調査(確定値)の公表について(令和6年3月27日)」  
[https://www.mext.go.jp/content/20240321-mxt\\_chousa01-000030586\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20240321-mxt_chousa01-000030586_1.pdf)
- 千々布 敏弥(2021)『先生たちのリフレクション主体的・対話的で深い学びに近づく, たった一つの習慣』 教育開発研究所 60-66
- 中央教育審議会答申(2022)『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と, 多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～